

# 白山中宮道における夏期から秋期のニホンザルの分布

上馬康生 石川県白山自然保護センター

## DISTRIBUTION OF JAPANESE MONKEYS FROM SUMMAR TO AUTUMN OF CHUGUDO AREA IN MT. HAKUSAN

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

### はじめに

白山地域のニホンザルの群れの分布の全体像について報告したものには、河合・他(1970)や水野(1984)などがあり、その後も伊沢、滝澤などにより、群れの分布や個体数変動について毎年精力的に調べられている(伊沢・他 1985, 滝澤・他 1991など)。しかしながら、最近の群れの分布に関する調査は、そのほとんどが冬期のものであり、冬から早春にかけての群れの分布状況はかなり明らかとなっているが、春から秋にかけての調査は、餌づけ群や集落周辺に出没する一部の群れ以外にはほとんどなく、その動向はわかっていない。その理由は、冬期は積雪のため目撃がしやすいことと、標高の低いところへ降りてきており、山麓の集落近くに出現するなど調査は比較的行きやすいが、春から秋には樹木の繁る林の中に隠れ、また群れの多くは谷の上流域など標高の高いところへ移動していると考えられ、発見が非常に困難であるからだ。

筆者は中宮道において、1988年から夏から秋にかけ毎月1回、鳥類および哺乳類のセンサスを続けている。その中にはニホンザルの記録も多くあったので、1990年からはこれに関する情報を特に注目して記録してきた。その結果、この地域の夏から秋のニホンザルの生息状況がいくつか明らかになってきたので報告する。

### 調査地域と調査方法

白山の登山道の一つである中宮道は、白山山頂から北方にのびる稜線の一つで、尾添川の上流の中ノ川と蛇谷を分ける稜線につけられている(図1)。全般的にブナなどの原生林や高山植物群落が続く、白山でも有数の自然環境をなしている。途中のゴマ平とシナノキ平に避難小屋があるが、中宮温泉から室堂までの距離が20km余りと長く、年間の利用者はせいぜい2~300人までで少ない。また中宮温泉付近以外は、登山道と避難小屋を除く

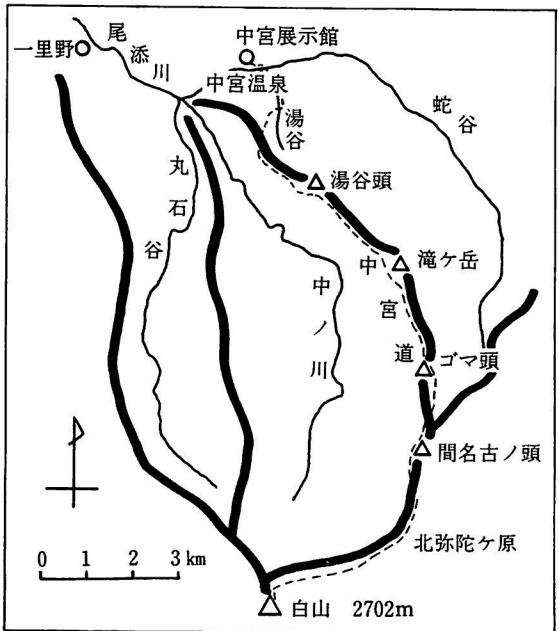


図1 調査地域

と、まったく人工的な施設はない。地形は稜線上の一部を除くと非常に急峻であり、植生は標高1600 mくらいまでがブナ林、それ以上はダケカンパーオオシラビソ林、標高約2200m以上にハイマツ林や高山植物群落がある。稜線沿いを除くと、斜面は全般的に高茎草原や低木林となっているところが多い。登山道は初め湯谷沿いに進み、左岸斜面を登って標高1160mで稜線に取り付き、その後ほぼ稜線づたいに進むが、湯谷頭南面など斜面を横切っているところがある。主として調査をした範囲の、登山道周辺の環境および標高を示すと図2のようになる。この中で原生的な自然ではないのは、標高約1000mまでと標高約1250m~1400mのブナ二次林である。後者は昭和30年代に伐採され、現在は部分的に残るブナの高木以外は、回復しつつある樹高3~5mのブナを中心とする林と高茎草原や低木林となっている。

調査は1990年から1992年にかけて、原則的には6月から11月まで月1回ずつ1泊2日で、標高1840 mのゴマ平避難小屋付近までにおいて行った。登山道を歩きながら、姿や声、糞、食痕などのニホンザルの情報を、高度計と地形図を用いて位置を確認しながら記録して集めた。上りに主として行ったが、下山のときにも新しい情報や上りに見落とした情報を記録した。また途中で、しばらく立ち止まって遠方からの声を探するなど、登山道付近以外の情報もできるだけ集めるよう努力した。群れに遭遇したときは、個体数や食物をできるだけ明らかにしようと努めた。糞に関しては、内容物を調べる目的で毎回新しいものを1~2個採集した。なお原則として、調査範囲内で中宮温泉付近など、明らかにカムリA群と分かる群れやその糞の記録はとらず、登山道が湯谷を渡って左岸の斜面を上り出してから記録をとった。

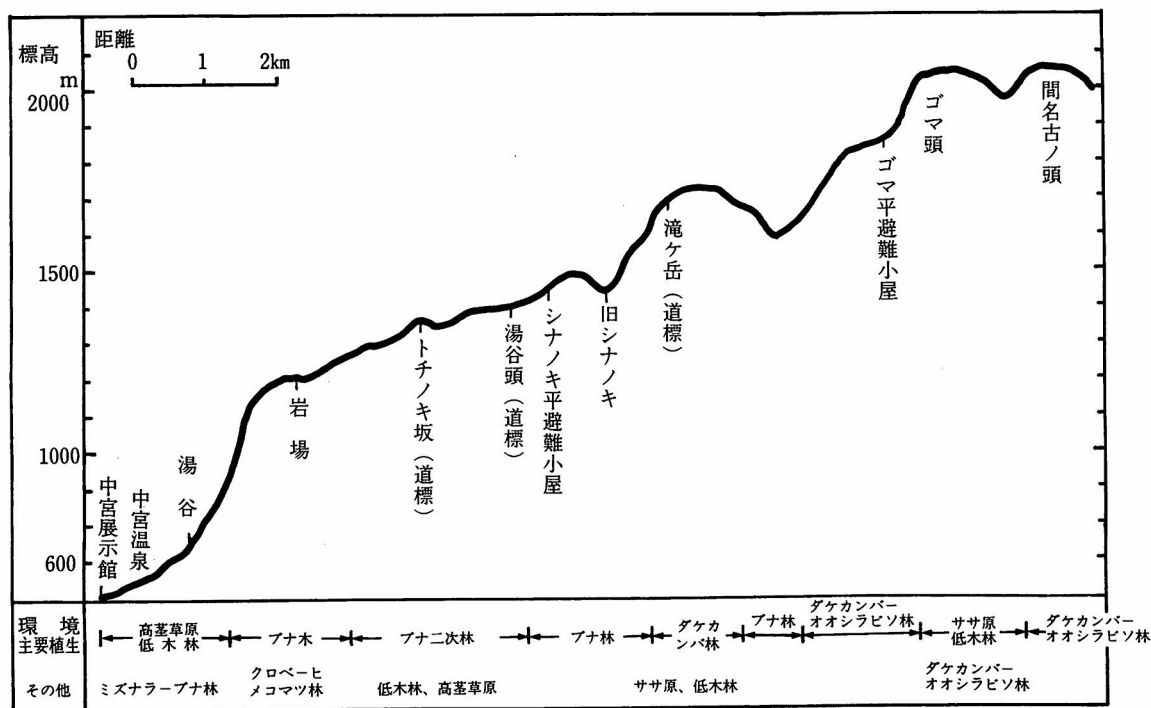


図2 調査地域の植生及び標高

## 調査結果

ニホンザルに関する何らかの記録を毎回とることができ、それぞれについて観察地点、標高、植生、観察事項について整理し、年ごとに結果をまとめると表1～3のようであった。なお個々の記録はここにあげた以上にあるが、場所的に近いものはまとめて一つの記録としてあり、合計137件となった。表の「調査上限」は、その時の調査の最高到達地点であり、出発地点の中宮展示館からそこまで往復したことを表す。ただし白山山頂となっているものだけは片道の調査である。「植生」で記載のないのは、声などの記録で正確な場所がわからず、植生が正確に記録できなかったものである。「観察事項」で、糞の(新)としたのは当日か1～2日前のものとして判断したもので、(1週)はかなり崩れているが内部に繊維質の軟らかい部分が残っているなど約1週間たっていると判断したもので、(古)はかなり古くていつのものか分からないものである。糞内容については、1つ1つ詳しくは見えていないが、種子の見たものはそのことについてふれてあり、1991年と1992年の記録の中で、(新)としてあるもので何も書いてないのは原則として繊維質しか見られなかった糞である。なお食物については、採集した糞の分析をした上で別途報告する予定である。群れの個体数の++は、その数まで数えられたが、周辺にいる気配があり実際にははるかに多いと考えられることを表す。群れには広がりがあり、急斜面である上に見通しが悪いので、実際の数に近いほど十分に数えられたことはなかった。

次に観察されたのが登山道のどの場所であるかをわかりやすくするため、各年ごとに位置を示すと

表1 中宮道におけるニホンザルの記録(1990年)

調査日	調査上限	観察地点	標高	植生	観察事項
7/20	ゴマ平	・ゴマ平北方	1820	オオシラヒソ林	糞(新)
		・滝ヶ岳南方	1640	ブナ林	糞(新)
8/16	シナノキ南東	・シナノキ西方	1400	ブナクロベ ヒメコマツ林	糞(1週)5個以上、種子と昆虫舎
		・シナノキ南東方	1470	ブナ林	糞(新)
		・トチノキ坂西方	1300	ブナ二次林	雄1頭
9/28	トチノキ坂東	・岩場南東方	1200	ブナ二次林	群れの声
		・トチノキ坂東方	1300-1360	ブナ二次林	群れ、ブナ樹上と低木林内で採食
		・岩場南東方	1250	ブナ林	糞(新)続く
10/22・23	シナノキ南東	・湯谷左岸	880		群れ(南方上部遠くより声)
		・岩場北方	1200	ブナ林	糞(新)
		・岩場	1210		群れ(遠方より声)
		・岩場南東方	1240	ブナ林	糞(古)続く
		・シナノキ西方	1410	ブナクロベ ヒメコマツ林	糞(新)
		・シナノキ小屋	1450		群れ(西方下部より声)
		・シナノキ西方	1390	ブナ二次林	糞(新)
		・岩場北方	1100	ブナ林	糞(新)
		・岩場北方	1050		群れ(北西方より声)
11/15・16	旧シナノキ	・岩場北方	1100	ブナ林	声
		・岩場北方	1190	ブナ林	群れ20++
		・トチノキ坂東方	1380	ブナ二次林	足跡(雪上)
		・シナノキ西方	1400	ブナクロベ ヒメコマツ林	群れ、足跡(雪上)
		・トチノキ坂	1360	ブナ二次林	群れ(南方下部より声)

表2 中宮道におけるニホンザルの記録 (1991年)

調査日	調査上限	観察地点	標高	植生	観察事項
6/5・6	ゴマ平	・岩場	1200	ブナークロベール ヒメコマツ林	雄1頭
		・シナノキ西方	1400	ブナークロベール ヒメコマツ林	糞(新)
		・シナノキ小屋	1460	ブナ林	糞(新)
		・滝ヶ岳	1680	ダケカンバ林	糞(1週以上)
		・滝ヶ岳南方	1680	ダケカンバ林	糞(1週以上)
		・ゴマ平北方	1620	ブナ林	糞(新)
		・シナノキ小屋	1450	ブナ林	群れ14++、チシマザサ・ブナ実(昨秋)食う
		・シナノキ西方	1400	ブナークロベール ヒメコマツ林	糞(新)、食痕点在(チシマザサ竹の子)
		・湯谷頭南方	1380	ブナ二次林	糞(新)続く、食痕点在(シシウド、ウド茎)
7/9・10	ゴマ平	・トチノキ坂北西	1290	ブナ二次林	糞(新)、食痕(シシウド茎)
		・トチノキ坂東方	1380	ブナ二次林	食痕(シシウド茎)
		・シナノキ東方	1470	ブナ林	食痕(シシウド茎、チシマザサ竹の子)
		・旧シナノキ	1410	ブナ林	食痕多い(シシウド茎)
		・滝ヶ岳北西方	1610	ブナダケカンバ林	群れ10++、チシマザサ・クマイチゴ茎食う
		・滝ヶ岳北西方	1630	ブナダケカンバ林	糞(新)
		・滝ヶ岳	1690	ダケカンバ林	糞(新)、種子含
		・滝ヶ岳南方	1590-1620	ブナ林	糞(新)6個
		・ゴマ平北方	1680	ダケカンバ林	糞(新)
8/19・20	ゴマ頭	・湯谷左岸	870	高茎草原	糞(新)
		・湯谷左岸	960	ミズナラーブナ林	糞(新)3個、種子含
		・岩場南東	1240	ブナークロベール ヒメコマツ林	糞(新)3個
		・滝ヶ岳南方	1620		群れ(西方下部より声)
		・滝ヶ岳南方	1560		群れ(西方下部より声)
		・旧シナノキ南東	1520	ブナ林	糞(新)
		・シナノキ西方	1400	ブナークロベール ヒメコマツ林	糞(新)
		・湯谷頭西方	1380	ブナ二次林	1頭
		・湯谷頭西方	1330	ブナ二次林	食痕(ウド茎)
9/10・11	間名古の頭	・湯谷右岸	820		群れ(声)
		・トチノキ坂西方	1300	ブナ二次林	食痕(ウド)、糞(新)2個
		・トチノキ坂東方	1320-1350	ブナ二次林	糞(新)点在、食痕(シシウド、タムシバ)
		・湯谷頭南東方	1400	ブナ二次林	群れ(北方下部より声)
		・湯谷頭	1390	ブナ二次林	糞(新)
		・トチノキ坂東方	1320	ブナ二次林	食痕(ウド茎)
10/8・9	ゴマ平	・湯谷左岸	930	高茎草原	糞(新)ヤマブドウ種子含
		・トチノキ坂東方	1370	ブナ二次林	群れ15++、糞
		・湯谷頭西方	1380	ブナ二次林	糞2個
		・滝ヶ岳	1690	ダケカンバ林	糞(新)
		・湯谷右岸	800	高茎草原	群れ(声)
11/6・7	ゴマ平	・湯谷左岸	770	ミズナラーブナ林	雄1、群れ(右岸より声)
		・湯谷左岸	850	高茎草原	糞(新)
		・湯谷	730	高茎草原	糞(新)

上馬：白山中宮道における夏期から秋期のニホンザルの分布

表3 中宮道におけるニホンザルの記録 (1992年)

調査日	調査上限	観察地点	標高	植生	観察事項
6/16・17	ゴマ平	・湯谷左岸	790	ミズナラ-ブナ林	糞(新)3個続く
		・湯谷左岸	810	高茎草原	糞(新)
		・岩場北方	1180	ブナ林	糞(1週以上)続く
		・岩場南東方	1210	ブナ林	糞(1週以上)
		・トチノキ坂西方	1290-1330	ブナ二次林	糞(1週以上)9個続く、食痕(シシウド)20本以上
		・トチノキ坂東方	1310-1320	ブナ二次林	糞(1週以上)2個、食痕(シシウド)
		・湯谷頭西方	1360	ブナ二次林	食痕(新)シシウド3本
		・シナノキ南東方	1470	ブナ林	糞(1週以上)
		・滝ヶ岳南方	1560	ブナ-ヒメコマツ林	糞(新)
		・ゴマ平北方	1590-1600	ブナ林	糞(1週)3個
7/13・14	ゴマ頭南方	・ゴマ平北方	1620	ブナ林	糞(新)
		・岩場	1210	クロベ-ヒメコマツ-ブナ林	糞(1週以内)種子含
		・岩場南東方	1280	ブナ二次林	糞(1週以上)
		・トチノキ坂西方	1300-1320	ブナ二次林	糞(1週以上)2個
		・トチノキ坂東方	1320	ブナ二次林	糞(1週以上)
		・シナノキ西方	1410	ブナ林	糞(1週以上)
		・シナノキ西方	1430	ブナ林	食痕(チシマザサ竹の子)
		・シナノキ南東方	1470	ブナ林	食痕(ヤグルマソウ)続く
		・旧シナノキ	1420-1450	ブナ林	糞(新)4個
		・旧シナノキ南東	1490-1500	ブナ林	糞3個(1週以内)
8/03・4	白山山頂	・滝ヶ岳北西方	1580-1610	ダケカンバ-ブナ林	糞(新)3個
		・滝ヶ岳南方	1690	ダケカンバ林	糞(新)5個続く
		・ゴマ平北方	1580-1610	ブナ-ヒメコマツ林	糞(新)2個
		・ゴマ平北方	1730	ダケカンバ林	糞(新)
		・ゴマ頭南方	2020	ダケカンバ-オオシラビソ林	糞(新)種子含
		・ゴマ平南方	1890	ダケカンバ林	食痕(シシウド)新
		・ゴマ平北方	1740	ダケカンバ林	食痕(ウド)新
		・ゴマ平北方	1600	ブナ林	糞(新)3個続く、草の種子含
		・滝ヶ岳南方	1570-1630	ブナ-ヒメコマツ林	糞(新)6個
		・滝ヶ岳	1680	ダケカンバ-オオシラビソ林	糞(新)
8/11・12	北弥陀ヶ原	・滝ヶ岳北西方	1600	ブナ林	糞(1週以上)
		・滝ヶ岳北西方	1550	ブナ林	食痕(ウド)
		・滝ヶ岳北西方	1520-1530	ブナ林	糞(新)2個
		・旧シナノキ	1420	ブナ林	糞(新)
		・シナノキ南東方	1460	ブナ林	食痕(新)ヤグルマソウ3本以上
		・トチノキ坂	1360	ブナ林	糞(1週以上)
		・湯谷右岸	800	高茎草原	声
		・岩場北方	1090	ブナ林	群れ? 北方の尾根から声
		・岩場北方	1200	ブナ林	糞(1週)
		・トチノキ坂西方	1300-1310	ブナ二次林	糞(新)、食痕(シシウド)10本以上続く
9/16・17	ゴマ頭南方	・トチノキ坂東方	1300-1360	ブナ二次林	糞(新)10個、食痕(新)シシウド5本以上
		・シナノキ西方	1410	ブナ林	糞(新)
		・滝ヶ岳北西方	1630	ブナ林	食痕(新)チシマザサ竹の子
		・ゴマ平北方	1580	ブナ林	糞(新)2個続く
		・ゴマ平北方	1780-1800	ダケカンバ-オオシラビソ林	糞(新)2個、種子含
		・ゴマ頭南方	2020	ダケカンバ-オオシラビソ林	糞(古)
		・ゴマ頭北方	1950	ダケカンバ-オオシラビソ林	群れ、近くで声
		・ゴマ平	1840	ダケカンバ、高茎草原	群れ13++、シシウド10本以上食う
		・岩場南東方	1230	ブナ-クロベ-ヒメコマツ林	糞(新)、ヤマブドウの種子含
		10/08・9	白山山頂	・旧シナノキ北西	1450
・滝ヶ岳南方	1680			ブナ-ヒメコマツ林	糞(1週以上)
・トチノキ坂西方	1300			ブナ二次林	糞(新)2個
・シナノキ小屋	1450			ブナ林	群れ、近くで声、ブナ実食う
・シナノキ南東方	1480			ブナ林	糞(新)2個、ヤマブドウ他の種子
・旧シナノキ南東	1440-1530			ブナ林	糞(新)7個、ヤマブドウ・サルナシ他の種子
・滝ヶ岳北西方	1580-1610			ブナ林	糞(新)9個、ヤマブドウ他の種子、繊維質も
・滝ヶ岳南方	1680-1710			ダケカンバ林	糞(新)9個、ヤマブドウ他の種子、繊維質も
・滝ヶ岳南方	1650			ブナ-ヒメコマツ林	糞(新)2個、ヤマブドウ他
・ゴマ平北方	1580-1610			ブナ林	糞(1週以内)2個、ヤマブドウ、オオカメノキ
・ゴマ平北方	1720-1730	ダケカンバ林	糞(1週以内)2個、ヤマブドウ、オオカメノキ		
・ゴマ平北方	1770	ダケカンバ-オオシラビソ林	糞(1週以内)		

11/05	トチノキ坂	・トチノキ坂西方	1350	ブナ二次林	糞(1週以上)
		・湯谷右岸	730		群れ、遠くから声
11/19-20	ゴマ平	・湯谷右岸	730	高基草原	群れ(カムリA群)78+
		・湯谷左岸	760	ミズナラ+ブナ林	群れ(カムリA群)7
		・岩場北方	1170	ブナ林	糞(古)
		・滝ヶ岳	1680	ダケカンパー	糞(古)
				オオシラビソ林	
		・滝ヶ岳南方	1710	ダケカンパ林	糞(古)6個続く
		・ゴマ平北方	1800	ダケカンパー	1頭(0才または1才)
				オオシラビソ林	
		・シナノキ西方	1430	ブナ林	雄1頭
		・トチノキ坂東方	1340	ブナ二次林	糞(新)

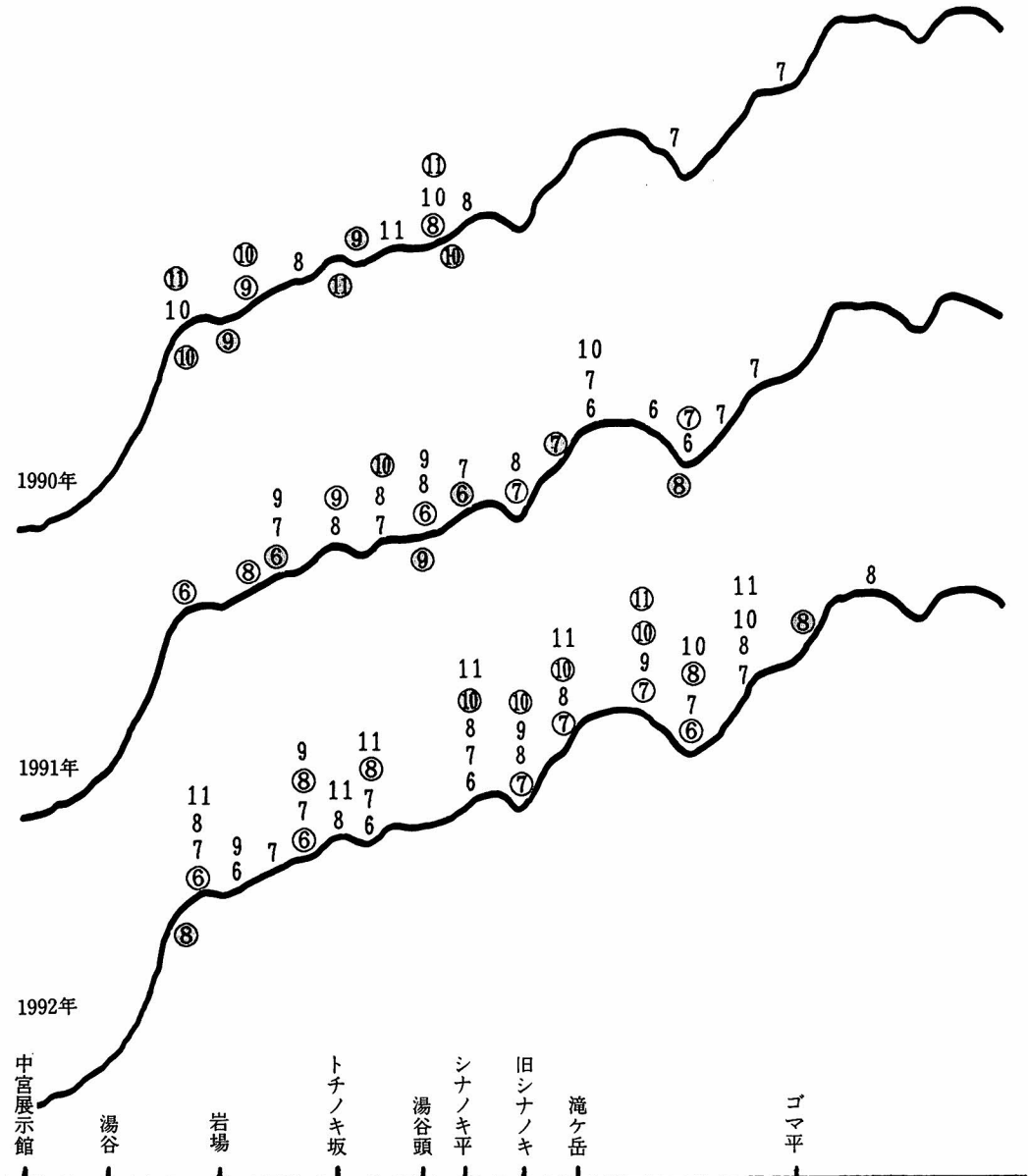


図3 中宮道におけるニホンザルの月別生息確認位置

(数字は月、丸数字の網は群確認、  
網なしは群と推定されるもの)

図3のようになる。図で曲線は登山道を、数字は月を表わす。また丸数字の網ぶせは姿か声で群れを実際に確認したもの、丸数字だけは糞や食痕の数から群れと判断されたもの、その他の数字は発見個体や糞の数が少なく群れかどうか不明なものである。線の上方に示したのは、その位置の登山道上での観察であり、縦に連ねてあるのは、ほぼ同じ場所で違う月にも観察されたことを表している。また線の下に示したのは、登山道を離れたところからの群れの声の確認を表している。なお、図には表1～3にあげた記録で、湯谷の標高900m付近までの記録は除いてある。それはカムリA群の記録の可能性があるのである(1992年11月の記録など)。以下の考察ではカムリA群を除いた群れについて述べる。

## 考 察

### 1. 月別の生息場所

最初に各年ごとにニホンザルの確認場所をみていくと、1990年は7月は1820mのオオシラビソ林や1640mのブナ林など、標高の比較的高いところで確認されたが、8～11月は毎月1050mから1470mのほぼ同じところのブナ林で記録されている。1991年は、7月には前年同様1800mのダケカンバーオオシラビソ林の標高の高いところでも記録されているが、9月が狭い範囲のほかは、6月から10月まで1190mから1690mまでの範囲のブナ林からダケカンバ林で広く記録された。また11月はまったく記録されなかった。次に1992年は、8月に標高1840mから2020mにかけてのダケカンバーオオシラビソ林など、3年間で最も標高の高いところで確認され、また6月から11月まで毎月1090mから1800mくらいまで、ブナ帯から亜高山帯下部まで広くまんべんなく記録された。

3年を通じていえることは、7～8月に最も標高の高いところまで上がっている点である。特に1992年の8月は2回調査しているが、2回とも2000m前後で記録され、この高度での生息が単なる一時的なものでないことが分かる。記録できた食物をみると、6月から8月はチシマザサの竹の子やシシウド、ウドなどの茎が多い。また8月に標高1840mのゴマ平付近では、群れが高茎草原でシシウドを集中的に食べているところを観察している。シシウドは9月になっても食べられている(1991年)ことから、かなり重要な食物と考えられる。標高の高いところでは、より低いところと比べて、残雪や芽吹きの関係からシシウドなどの生える高茎草原の最盛期が遅く、7～8月でもニホンザルの食物となるものが多くあることが、そのころ最も標高の高いところでも確認された原因と推定される。なお8月に高山帯までの調査を2回行ったが、そこまで上がっている兆候はみられなかった。

次に9月から10月はヤマブドウなどの木の実の種子が糞の中に多く見つかる。ブナの実についても、9月(1990年)や10月(1992年)に樹上で食べているところを目撃している。ブナは、3年間の実のなり具合をみると、1990年が大豊作で山全体に多く、1991年は凶作でまったく見られず、1992年は一部でなっていたが全体としては不作であった。1990年は11月中旬でも、はっきりした群れがブナ林で複数確認された。すでに積雪が見られたが、地上にまだブナの種子が多数残っていたことが、この時期まで少なくとも標高1400m地点まで群れがいた原因と考えられる(この月は標高1480m以上は調査できていない)。1991年の11月にまったく記録されなかったのも、ブナの実がまったくなかったことが大きな原因の一つといえよう。この年は、ヤマブドウなど他の実も多くなかった。それに比べ1992年は、ブナこそ全体としては少なかったが、ヤマブドウなどが豊作であったことが、11月でも標高の高いところで記録された原因と思われる。ただし1990年のように明らかな群れの観察はできなかった。なお1992年11月に標高1800mで観察したのは、0才(または1才)の子ザルであり、付近に親や群れの存在が考えられるが、当日は強風と雨で観察条件が悪く確認できず、前日も付近の雪の上に足跡等

は見つかっていない。

食痕や糞内容の分析をした上でないとはっきりとはいえないが、表から主な食物は6月から8月が草本類で、9月から11月が木本類の実である傾向がわかる。高茎草原は登山道のある稜線上には少なく、両側の谷の斜面に低標高地から高標高地まで分布している。またブナは稜線上に多く、ヤマブドウはブナ林内には少なく、登山道沿いでは標高約1250m~1400mの二次林に広くみられる。各月に記録された登山道の場所が、必ずしもその月のニホンザルが生息する主要な場所(食物のある)とは限らない。すなわち登山道が稜線上にあることから、一方の谷の斜面から他方の斜面へ移動するために通過したときに記録されただけの場合も多いと考えられる。実際1992年8月に、ゴマ平からゴマ頭で観察した群れの動きがそうであった。そこで、記録された単なる細かい標高的な位置や植生でニホンザルの生息場所を決めつけることはできない。年によって全域で毎月記録されたり、記録されない月があったりするのはそのためであろう。年によっては前述のように秋に高標高地で早くからいなくなることも考えられるが、おそらく6月から10月まで、稜線沿いでみれば標高1100m前後から1800m付近まで連続して生息していると考えられる。

## 2. 群れ数について

3年間の調査で毎年のように、同じ日にかなりの距離を隔てて目撃または声による群れの確認をしたことが何度もあり、明らかに複数の群れが調査範囲にいたことが分かった。その中の2つの例を以下に述べる。1991年6月6日はゴマ平から中宮展示館へ下山した日であるが、前日ゴマ平北方の標高1620mで新しい糞を観察し、これに続く滝ヶ岳でも少し古い糞がみられたものの、その後サルスの記録はなく、シナノキ平避難小屋(標高1450m)まで下ったところで群れに遭遇した。少なくとも14頭数えられ、ブナ林下でチシマザサの竹の子を食べたり、残雪の周りの落葉をかき分け、前年のブナの種子を探して食べていた。その後まもなくシナノキ平避難小屋の西方(標高1380~1400m)で新しい食痕や糞を記録したあとは、トチノキ坂北西方の標高1270mまで記録はなく、そこで少なくとも9頭の群れに遭遇した。さらに下って標高1190mで、8個以上続く新しい糞が記録された。記録場所を示すと図4のようになり、3つの群れが存在していることがわかる。なお、最も標高の低いところの群れの記録と、その次の群れの記録は図では同じ群れとしてあるが、離れていることから別の群れの可能性があり、全体で4群れかもしれない。

次に1992年8月11日には、岩場のはるか北方の登山道に続く尾根(標高1100前後)で群れと考えられる声を記録し、次にトチノキ坂の前後(標高1300~1360m)で新しい糞や食痕を連続して多数記録し、少し離れてシナノキ平避難小屋西方(1410m)で新しい糞1個、滝ヶ岳北西方(標高1630m)で新しい食痕を

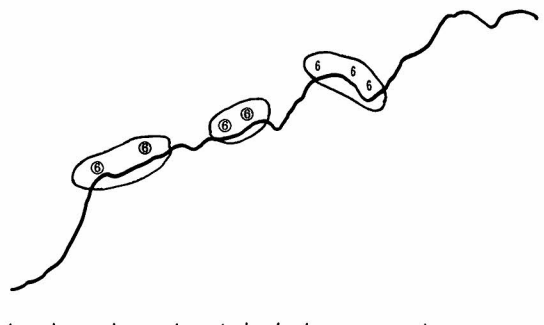


図4 中宮道における群の分布推定(1991年6月)

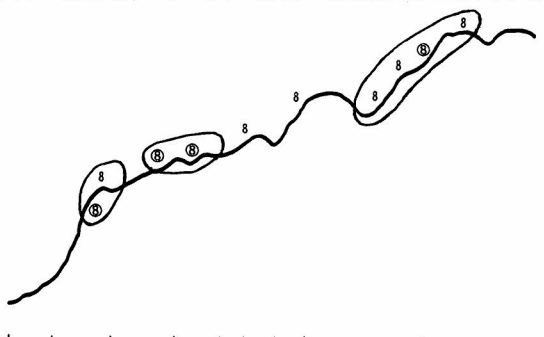


図5 中宮道における群の分布推定(1992年8月)



1個記録した。その後はゴマ平の北方の標高1580m, 1780m, 1800mで1～2個ずつの新しい糞を観察し、翌12日にはゴマ頭の北方の標高1950m付近で声で確認した群れが、少しずつ移動して標高1840mのゴマ平付近の高茎草原まで下り、シシウドを食べた後斜面を徐々に下っていくのを目撃している。数えられたのは13頭であるが、周辺のしげみの中に広がっており、かなり大きな群れであった。これらを示すと図5のようになり、少なくとも3つの群れに分けることができる。

以上のことから、少なくとも夏期に今回の調査範囲には3群以上の群れが存在していることが判明したが、十分に個体数が数えられたものではなく、滝澤・他(1991)などで記載されているどの群れであるかを推定することはできなかった。河合・他(1970)によると、中宮道周辺にはタイコの群れと湯谷の群れがいるとされている。また水野(1984)ではこのうち湯谷の群れの記載はなく、タイコの群れはA, B1, B2の3群となり同じ付近に重なり合って分布しているとされている。なおタイコの群れに由来する群れは、1991年現在ではさらに分裂して、A群が4つに、B群が3つに分かれていると推定されている(滝澤・他 1991)。しかし1970年の報告以降、冬期以外の調査はほとんどされていないので、中宮道周辺の群れの区別もできていない。前述の湯谷の群れに関しても、1970年の報告以降は調査もなく動向がまったく不明であり、誰の報告にも述べられていない。当時この群れを調べた林によると、7月25日から8月3日まで、現在の旧シナノキとした場所周辺から湯谷頭の東方斜面(蛇谷側)に観察され、11月には中宮道の西側を通過して中宮温泉にも来て、12月中旬から4月上旬は湯谷中流にいとされている(林 1970)。前述のようにこの付近には現在2群以上が夏から秋に生息している。なお、林の報告の中で使用されている「とちのき坂」は、現在のそれとは位置が違っている。現在は林の記載している場所より直線で2kmほど北西の位置である。

## ま と め

群れが各月に複数分布している状況と、食物となる植物の分布状況を合わせて考えると、群れの季節的な分布は、夏に標高の高いところ、冬は低いところにそれぞれ行動域を持ち、春と秋はその中間地域にいて、季節移動は一定の方向に向い、あともどりすることはないとする林(1970)の述べるような単純なものではない。1年を通してみれば、全体としてその行動域の標高が、夏に高いところ冬に低いところにある点は違っていないが、高茎草原やブナ林のサルの食物の存在状況で、稜線上(登山道)に上がったたり谷の斜面へ下ったりを繰り返しながら夏から秋を過ごしているのである。決して夏の方が秋より標高の高いところに行動域をもっているとは限らない。そして稜線に食物、特にブナの実など主要なものが多くあれば秋遅くまで標高の高いところに残り、少なれば早く斜面下方へ移動すると考えられる。さらに冬期の冬群れの分布状況から推定すると、今回明らかになった中宮道

年に登山道を歩きながら姿や声、糞、食痕などの情報を集めた。

2) 6月から10月頃まで標高1100m前後から1800m付近にかけて連続して生息してしており、少なくとも3つの群れに区別できた。

3) 毎年7月から8月には最も標高の高いところで記録され、最高位置は2020mであった。

4) 6月～8月はシシウドなどの草本のある高茎草原が、また9月～11月は実のなっているブナ林やヤマブドウのある林縁部の低木林などが、それぞれ主要な食物採取場所と考えられる。

5) 秋の実、特にブナの実の豊凶が、群れの低標高地への移動時期に大きく関与していると考えられる。

## 文 献

- 林 勝治(1970) 白山周辺におけるニホンザルの生態学的研究-II。白山の自然, 344-375, 石川県。
- 伊沢絃生・水野昭憲・滝澤均(1985) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について。石川県白山自然保護センター研究報告第12集, 41-47。
- 伊沢絃生・水野昭憲・滝澤均・志鷹敬三(1986) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について-その2-。石川県白山自然保護センター研究報告第13集, 37-48。
- 伊沢絃生・滝澤均・志鷹敬三・水野昭憲(1987) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について-その3-。石川県白山自然保護センター研究報告第14集, 67-77。
- 河合雅雄・東滋・吉場健二・林勝治・竹下完・水原洋城・伊沢絃生(1970) 白山周辺におけるニホンザルの生態学的研究-I。白山の自然, 335-343, 石川県。
- 水野昭憲(1984) 石川県のニホンザル分布。石川県白山自然保護センター研究報告第10集, 87-98。
- 滝澤均・伊沢絃生・志鷹敬三・水野昭憲(1989) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動について-その4-。石川県白山自然保護センター研究報告第16集, 49-63。
- 滝澤均・伊沢絃生・志鷹敬三・水野昭憲(1990) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動-その5-。石川県白山自然保護センター研究報告第17集, 23-37。
- 滝澤均・伊沢絃生・志鷹敬三(1991) 白山地域に生息するニホンザルの個体数と遊動域の変動-その6-。石川県白山自然保護センター研究報告第18集, 33-47。